

大問	小問	解答 番号	正解	配点	解説
<div> <div></div> 50点 </div>	問(一)	①	貢献	2点	
		②	盛	2点	
		③	詳	2点	
		④	検知	2点	
		⑤	携	2点	
	問(二)	⑥	㊦	3点	<p>A が含まれる文の文末が「だろうか」になっており、次の文にも「からだ」という語があるため、適当なのは「なぜ」。</p> <p>B の前後で対比がなされており、かつそののちに「比較」という語も出てくるため、適当なのは「一方」。</p> <p>C の一つ前の段落には「第五兆候」とあり、C 以下ではその具体例が挙げられているため、適当なのは「たとえば」。</p>
	問(三)	⑦	㊦	3点	<p>X が含まれる文は「すなわち」から始まっており、前文の言い換えであることがわかる。またこのことは、「どこを經由して」と「思考の経路」、「どこで終わって」と「結論」の組み合わせからも推測できる。ゆえに「どこから始まって」に対応するものとしては、選択肢の中では「端緒」が最も適当である。</p>
	問(四)	⑧	㊥	3点	<p>Y の次の文では、「必要な部分のコストが、(中略)恐ろしいほど少ない機器が多い」と述べられている。また Y 以前の文で、「より周辺のこと」ばかりに注力することに対する筆者の否定的態度を読み取ることができる。このような文脈から、選択肢の中では「高騰」が最も適当である。</p>
	問(五)	⑨	㊤	4点	<p>㉗は「二 思考法」の内容を端的に表したものの、㊦は該当箇所では挙げられている一例に過ぎず、また利点には触れられていない。㊥の内容は該当箇所では触れられているが、それはあくまで一例として述べられているに過ぎない。そして「スパゲティ症候群」の兆候の名称とは、筆者にとってはマイナスの価値を持つ状態を端的に表現する名称、もしくはマイナスの価値を持たせずニュートラルな名称がつけられているとその他の箇所から読み取ることができるため、㉗は適当ではない。ゆえに、該当箇所の最初と最後に二度も同内容が述べられている㊤が最も適当。</p>
	問(六)	⑩	㊧	4点	<p>㊦に関しては、評価を行うことそのものが否定すべきこ</p>

				<p>とではなく、それを行った結果の「本当に必要な部分のコストが、(中略) 恐ろしいほど少ない」ことが問題であると本文から読み取れる。ゆえに、㊦は不適当。㊧と㊨に関しては、該当箇所では述べられていない。㊩に関しては、この箇所では挙げられている第四兆候の一つの具体例に過ぎない。ゆえに、㊪が最も適当。</p>
問(七)	⑪	㊦	3 点	<p>金属を例に話が展開されている段落と関係するのは㊧と㊨。そして「このようにして」という語で適切に文がつながり、「テーマ」という語と密接に関係する内容が展開されている段落は㊧の含まれる段落となる。ゆえに、㊦が最も適当。</p>
問(八)	⑫	㊧	4 点	<p>㊧は「否」と答える間の前提部分であり「否」の理由でないため不適当。㊩に関しては、「否」と答える間の内容そのものであるため不適当。㊨は傍線部(1)が含まれる段落において、そもそも述べられていないため不適当。㊪に関しては、読点の前後の内容は確かに述べられているが、しかしそのつながりが誤っているため不適当。ゆえに、㊫が最も適当。</p>
問(九)	⑬	右記	8 点	<p>(解答例)</p> <p>皿の上のスパゲティのように、現代技術は複雑にからみ合った状況にある。そして、現代技術のからみ合った構造を理解できるのはその構造を設計し製造した人のみで、市民はそれを理解できない。(89 字)</p> <p>(解説)</p> <p>傍線部(2)の前後の内容を定められた文字数内で要約することが求められる。例えば、「こういう状況」を説明するためにスパゲティ症候群の第一兆候を詳しく記述してしまうと、文字数をオーバーしてしまう。ゆえに使用する語を取捨選択し、必要な部分以外は簡潔に記述する必要がある。</p> <p>(採点基準)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 現代技術の状況を記述している。(3 点) 2. 現代技術の構造を理解できるか否かに関し、理解できる一部の人と理解できない市民の対比が記述されている。(3 点) 3. 適切な文脈において三つの語を使用している。(2 点)
問(十)	⑭	㊨	4 点	<p>㊧は「引き算の思考」が不適当。「ワイヤレス化」の話は本文中に述べられていないため、㊨は不適当。「第二兆</p>

					候」に関し本文では局所的な最適化の欠点が述べられており、全体的な視点の利点は述べられていないため、㉞は不適当。リサイクルの際にトータルのコストを下げる話は本文中で述べられていないため、㉟は不適当。ゆえに、㊦が最も適当。
	問(十一)	⑮	㉞	4 点	㉞において、一文目の内容は本文中に記述がある。しかし二文目は本文に記述がなく、三文目は筆者がむしろ否定している考えである。ゆえに、㉞が本文の内容とは合わない。